

表現・コミュニケーション力を高める体育の授業

－わかる・できるをめざすマット運動の授業を通して－

小田啓史・今崎英明・東川安雄*・松田泰定*

P.E. Class to Enhance the Ability of Self-expression and Communication

－ Through the Class of Gymnastics on the Mat which Aims at the Students' Understanding and Accomplishment －

Hirofumi ODA, Hideaki IMASAKI, Yasuo HIGASHIKAWA, and Yasusada MATSUDA

Abstract. The purpose of this study is to clarify the model and the way in which we increase the students' ability of self-expression and communication through gymnastics on the mat. As the result, it is confirmed that the interaction between development of “the internal representation” and “awareness of others” is useful for increasing the ability of self-expression and communication.

Key words: ability of self-expression and communication, internal representation, awareness of others

I. はじめに

本校では、21世紀をにらみ、めざすべき人間像を「自分を見失わずに異なる文化や異なる価値観を受容し、情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき、よりよい意思決定を目指し行動しようとする人間像」と設定した。そして、そのための基礎・基本として「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」の3つの力こそが、各教科の学習に対しても有機的にはたらく力であり、義務教育終了段階で、めまぐるしく状況が変化する国際化社会、情報化社会を生きていく生徒たちに、つけておくべき力であると考えている。

保健体育科においても、これら3つの力はこれからの時代を生きる子どもたちが、生涯にわたって運動・スポーツを行っていくための基礎・基本であり、これら3つの力の育成を授業を通して図っていく取り組みを進めてきた。(恩地ら、2003)

今年度は、現代社会からの要請も強く、あらゆる生活の場面で生きてはたらく力としての「表現・コミュニケーション力」の育成に焦点を当てた研究を開始した。

また、学習指導要領の体育分野の目標の一つに、「課題を解決するなどにより、運動の楽しさや喜びを味わうとともに、運動の技能を高める」とある。このことは、運動技能を向上させていくという課題とともに、人とのかかわりや交流、他者とのコミュニケーション活動を通して、仲間とともに活動の仕方や内容を考え、工夫したり、協力して取り組んでいくことが必要であることを示唆している。また、球技など

*広島大学大学院教育学研究科

実際の活動場面においても、集団技能の向上や意図的な戦術を遂行するときに、互いに意見を伝えたり、相手の異なる意見を受けいれたり、他者とのコミュニケーションをとりながら積極的に展開していく必要があることから、体育の授業で他者とのコミュニケーション力の育成を積極的に行うことは重要な視点であると考えている。

そこで、今年度の研究テーマを、表現・コミュニケーション力を高める体育の授業とし、授業実践に取り組んだ。

Ⅱ. 本校の3つの力と体育科で育成する4つの資質・能力との関連

体育の授業は、身体活動を通して行われる学習活動である。ここでは、運動やスポーツが「できる」(技能)ようになることが重要な目標とされる。また、できるようになるためには、その根底としてどうしたらできるようになるのか、うまくなっていくのかが「わかる」(知識・理解)必要がある。つまり、技能と知識・理解においてのその関係には「わかる」と「できる」との統一が必要であり、「わかって、できる」ことを目標とした授業が展開されなければならない。身体活動を通しての体育の授業では、「わかる」と「できる」、すなわち「知識・理解」と「技能」の統一体としての学力の形成が望まれる。

「わかる」(知識・理解)と「できる」(技能)をめざす体育の授業では、「なぜ」「どうして」「どうしたら」といった思考活動が展開されなければならない。したがって、授業において、実験的場面や比較場面、試行場面などを設定して、生徒に考えさせながら「科学的思考力」を培い、技能についての知識や認識を肥やし、技能を向上させようと考えている。さらに、技能を向上させることを通して、より高い技能についての知識や認識を深めさせようと考えている。そして、「できる」と「わかる」の統一を図り、その両者をそれぞれ高めることを保障していくことこそ、その結果として、やる気(学習意欲)やがんばろうとする動機付け・前向きな態度へとつながり、さらに高い技能や知識・理解を求めるといったスパイラルな学力形成が成立すると考えている。

つまり、体育科では「わかる」「できる」をめざすことを学習の中心的課題に据えながら、学習活動において、自己の現状を分析させ、どうやったらうまくなっていくかを思考・交流させることで、個人の技能あるいは集団における技能・戦術に磨きをかけさせ、目指すべき自己に近づけていく過程をたどることが重要であると考えられる。したがって、授業実践を行う上で、体育科が育成する力を、次の4つの資質・能力とし、次のように整理した。

(1) 現状認識(分析)力	自分やチームの技能の現状や課題を認識し、分析する力
(2) 科学的思考力	仲間とのかかわり、交流を通して、どうやったらうまくなるかの内容や方法を考えたり、課題を解決していくことができる力
(3) 選択力・判断力	いろいろな資料や情報、他の人の意見を認めた上で、その中から問題を解決するための手だてを選択したり、判断する力
(4) 行動化・態度化	自分が判断し、選択したことを実際に実行していく力

次の図1は、本校のめざす人間像の基礎・基本としての3つの力である「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」を支える、体育科における4つの資質・能力との関係の概

略を示したものである。「わかる」「できる」を重点に据えた授業を展開するときに、体育科で目指している「科学的思考力」「選択力・判断力」の資質・能力の育成と、この3つの力との関係は特に深い。また、その資質・能力の育成には、表現・コミュニケーション活動が不可欠であり、これら4つの資質・能力を高めることが、本校のめざす人間像の3つの基礎・基本の育成と結びついていると考えられる。

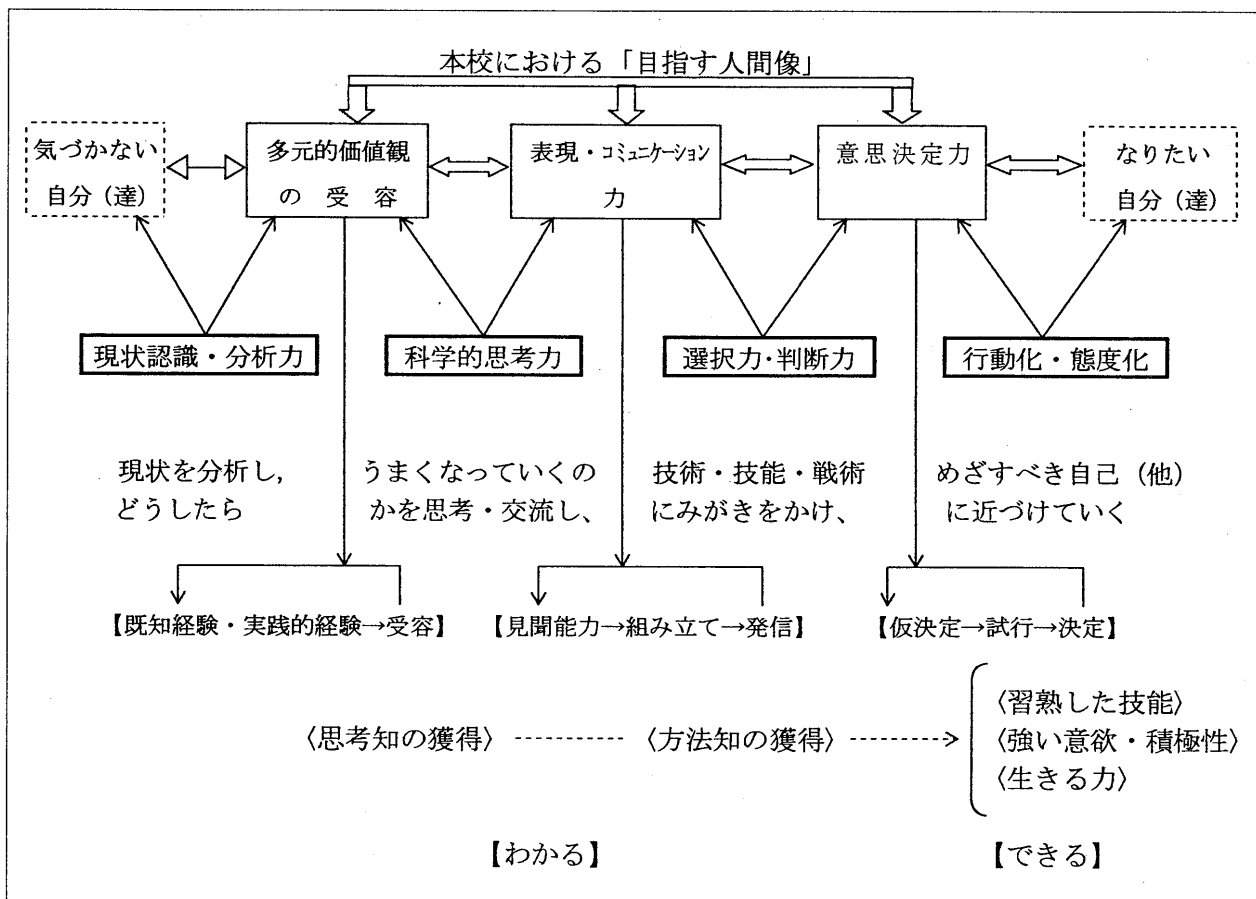


図1 体育科で育成する4つの資質・能力と本校の3つの力との関連図

Ⅲ. マット運動における表現・コミュニケーション力の育成

以下は、第2学年1・2組男子40名を対象に10月～11月末にかけて実施した。総計20時間のマット運動の実践である。

1 指導目標

- (1) マット運動に必要な身体感覚を養いながら、単一技のポイントを理解させ、個々の技ができるようにする。
- (2) 自己の能力に応じた技を組み合わせ、組み合わせ技（連続技）を表現できるようにする。
- (3) 単一技や組み合わせ技（連続技）の練習を通して、技能向上のためのコミュニケーション活動をグループ内で発揮できるようにする。
- (4) 器具を点検し、状況や場に応じて、安全に留意して運動する態度を養う。

2 単元での計画

- (1) オリエンテーション …………… 1時間
- (2) 既習の単一技及び新しい技の習得・習熟 …… 11時間
- (3) 組み合わせ技（連続技）の習熟 …………… 6時間
- (4) 発表会とまとめ …………… 2時間

3 マット運動における指導とその力点

前述したように、体育科では「わかる」「できる」をめざすことを学習の中心的課題とし、学習活動において、生徒に自己の現状を分析させ、どうやったらうまくいくかを思考・交流させることで、技術認識を肥やし、技能を高めさせ、目指すべき自己像・他者像に近づけていくよう指導している。したがって、マット運動においても、技のコツやポイントを理解させ、技ができるようにさせることを中心的課題として、仲間とともに活動の仕方を考え、工夫し、互いに意見を伝え合うようなコミュニケーション活動を中心に授業を進めていこうと考えた。そして、授業を通して、「表現・コミュニケーション力」を高めることをねらいとした。

本校では、「表現・コミュニケーション力」を育成するための手だてとして、「内的表象を高めさせること」と「相手を意識させること」の2点に着目している。なぜならば、コミュニケーションの過程において、表現したり伝達（発信）したりするためには、内的表象が生徒に備わっていなければ、相手に思いを伝えることは困難だからである。また、対象とする相手の人数や状況に応じた表現や伝達（発信）をするためには、「相手を意識させること」が必要となるからである。

したがって、マット運動においても、表現・コミュニケーション力を育成するポイントとして、以下の2点に力点をおいて指導を展開した。

- (1) 内的表象を高めさせる …… 表現したり伝達したりするため中身をもたせる
- (2) 相手を意識させる …… 相手の思い、技能の習熟状況に心を寄せながら、相互に理解し合えるように相手を意識して伝える

実際の授業にあたっては、まず、「内的表象を高めさせる」ために、生徒一人ひとりが技を行うときに感じる感覚、例えば、自分の身体とマットの上での接地感覚、回転する感覚、体をひねる感覚、逆さになった体を支持する筋力や位置感覚など、身体の状態や動作パフォーマンスに対する感覚を捉えさせるようにした。そして、互いにその感覚を仲間に伝達（発信）させ、相互に共有させることを通して、自分にはない感覚を共に自覚させるようにしていった。

次に、身体部位の使い方に対して、実験的場面や比較場面を設定して、考えさせることを通して、技術・技能に対する認識を肥やしていった。例えば、倒立を例にあげれば、両手の位置や指の間隔について、また、目線やあごの位置について、そして、肘角や腰角、かかとの位置や背のそり等について、極端な例を比較させながら、技術認識を肥やし生徒一人ひとりに内的表象を養っていった。

「相手を意識させる」ことにおいては、生徒一人ひとりの個人差に着目させていった。まず、マット運動の得意な生徒・うまくできる生徒から、苦手な生徒・技がうまくでない生徒に対して、感覚や技術ポイント等を伝達（発信）させた。その際、一方向的な伝達（発信）が必要なのではなく、できない生徒の心情をくむことがまず大切なことであり、両者が一つの課題を共有できるように努めさせていった。さらに、伝達（発信）は一方通行ではなく、双方向であることが同様に大切であり、苦手な生徒・うまくできない生徒からも発信できるよう、十分に時間をかけて技術認識を培うべく、指導を心がけていった。

これら2つの力点は、単一技の練習においても、組み合わせ技（連続技）の練習においても同様に行った。また、組み合わせ技（連続技）の練習では、さらに、技の大小、静と動、遅速やつなぎ方、空間の工夫等の視点も加えて、学習活動を展開した。図2は、伝達（発信）を主とした表現・コミュニケーションのモデル図である。

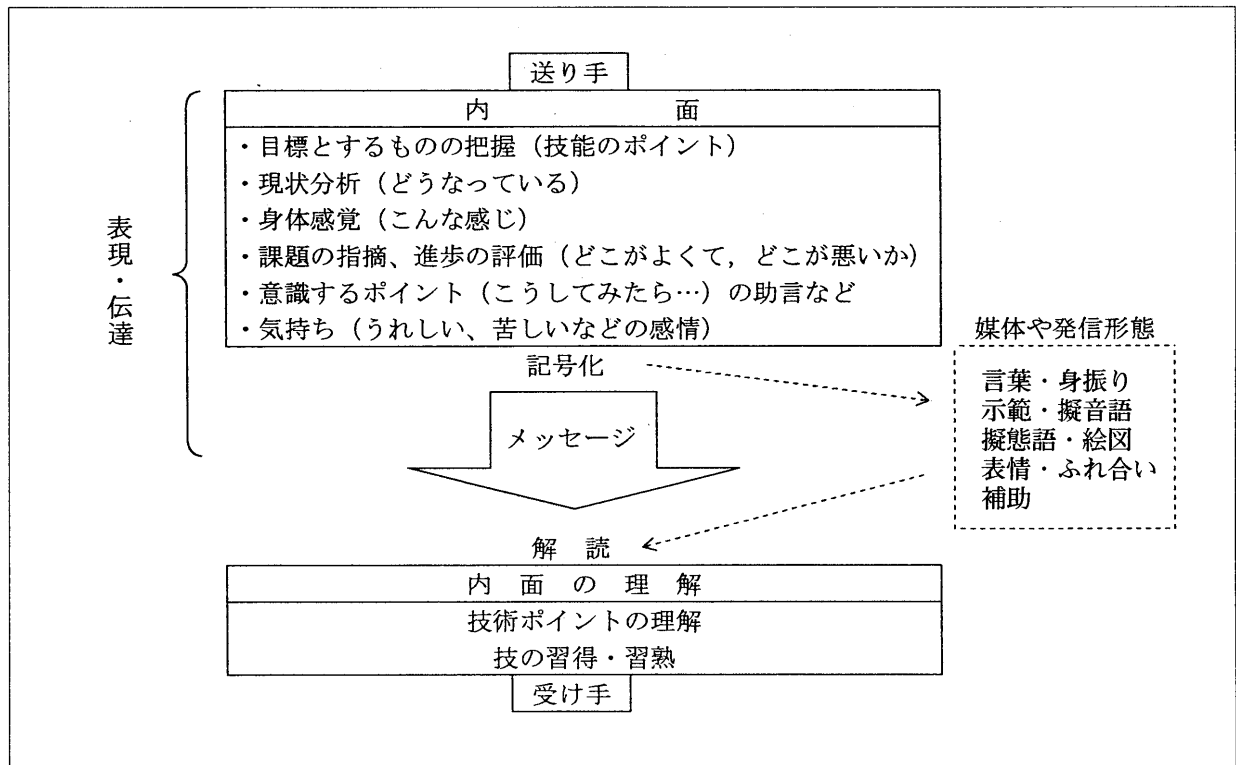


図2 マット運動における送り手から受け手へのコミュニケーション過程

IV. 結果と考察

指導を終えた後、VTRを視聴させ、単元の取り組み全体をふり返らせた。技能の向上を図ることができたか、知識・理解を深めることができたか、コミュニケーション活動の成果や課題、そして、全体の活動はどうであったかをチェックカードやアンケート・自由記述を通して自己評価させた。以下は、これらをもとにした考察である。

1 技能の向上について

チェックカードは、それぞれの単一技がどの段階まで到達したかを自己評価したものである。それぞ

れの単一技について、3段階もしくは4段階で設定した。また、単元開始前と単元終了後の技能の状態をチェックさせ、技能の向上がどうかであったかを自己評価させた。表1はそれぞれの単一技について、単元開始前と単元終了後の技能の段階を比べたものであり、図3はその結果をグラフにしたものである。

まず、前転と後転については、全員が小学校段階で、マット運動の授業で経験してきているものの、開脚前転、開脚後転については、全体の約4割の生徒が、伸膝前転、伸膝後転、倒立前転、後転倒立については、ほとんどの生徒が経験していなかった。このことから、単一技の学習においては、多くの生徒にとって、より正確にとか、より美しくダイナミックにといった観点ではなく、新しい技に挑戦してできるようにする取り組みが中心になったといえる。しかしながら、授業を通して、段階4や段階3の評価をつけた生徒が多くなったことも読みとれる。これは、授業の中で、生徒同士が互いにかかわり合いながら、練習を積み重ねて、単一技のレベルアップが図られた結果だと考えられる。

2 アンケートの結果から

単元終了後のアンケートをもとに以下の5点について、マット運動の授業実践の考察をおこなった。

表2は、アンケートの質問項目であり、図4は集計結果をグラフにしたものである。

各項目の回答を「非常にあてはまる」を5、「あてはまる」を4、「どちらともいえない」を3、「あてはまらない」を2、「全くあてはまらない」を1として数量化し、平均値を求め分析した。

設問1～8では、5の設問をのぞいてすべて平均値は4以上であった。このことから、技の習得

表1 マット運動チェックカードの結果

技能	段階	評価に関する項目内容	自己評価	
			練習前(人)	練習後(人)
前転	経験なし		0	0
	1	横に曲がる前転である	1	0
	2	まっすぐにまわるが、起きあがる時に手をついて立っている	7	0
	3	起きあがる時に手をつかずに立つことができる	18	6
開脚前転	経験なし		21	0
	1	足の開きが少なく、ひざも曲がるが一応立てる	4	8
	2	ひざが少し曲がるが、両手をついて立てる	7	6
	3	膝が伸び大きく開脚してきれいに立ち上げられる	3	12
伸膝前転	経験なし		36	3
	1	踵は浮きが立てない	1	21
	2	踵は少し曲がるが回転して立てる	0	11
	3	踵が伸び、大きく回転して立てる	0	2
倒立	経験なし		21	0
	1	補助倒立ができる	18	37
	2	一人で壁倒立ができる	14	34
	3	補助倒立から手を離してもらい1~2秒程度バランスを保てる	8	34
倒立前転	経験なし		35	0
	1	補助があればできる	0	3
	2	倒立が不十分だが前転できる	1	4
	3	前転への移行がぎこちないが倒立姿勢ができ何とか一人でできる	0	16
後転	経験なし		22	0
	1	横に曲がるが膝をついてなら起きられる	6	0
	2	まっすぐ回転でき起きあがる時に膝をついてしまう	7	3
	3	まっすぐ回転でき起きられる	11	11
開脚後転	経験なし		5	23
	1	膝はまがり回転も曲がるが起きられる	5	5
	2	膝も伸び、まっすぐ回転して起きあがる	5	9
	3	回転途中で伸膝から開脚してスムーズに大きな回転でできる	5	23
伸膝後転	経験なし		36	0
	1	ひざは少し曲がるが何とか立てる	0	23
	2	膝が伸び大きく回転して立てる	0	6
	3	直立の姿勢から前屈して、スムーズに回転してできる	1	8
後転倒立	経験なし		36	0
	1	腕の押し上げと体を伸ばすタイミングが合わず、後転になる	0	7
	2	補助があれば何とかできる	0	12
	3	倒立の姿勢は不十分だが、マットから頭が離れ腰を高く上げられる	1	9
側方倒立回転	経験なし		18	0
	1	膝が曲り不十分だが何とかできる	9	9
	2	一直線上ではないが何とか倒立を経過し回転できる	6	8
	3	一直線上に着手・着地しスムーズにできる	4	20

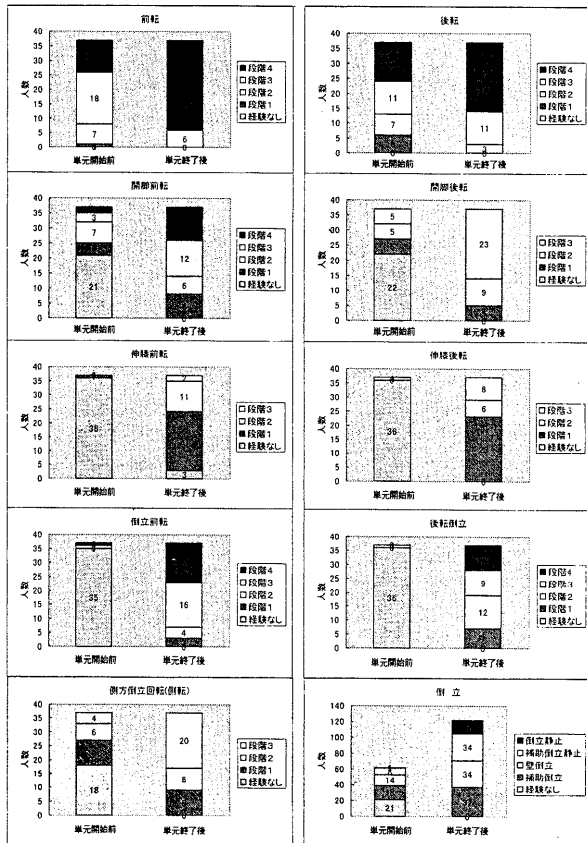


図3 各技の授業前と授業後の比較

表2 マット運動ふり返りアンケートの質問項目と5段階評価の平均値

表現・コミュニケーション活動（内的表象を高める）（相手を意識する）	平均値
1 グループの練習の中で、お互いに仲間の技を観察することができたと思う。	4.32
2 技を行ったときに身体に受けるの色々な感覚（腕支持感覚、逆さ感覚、など）をたくさん感じる事ができたと思う。	4.27
3 技を行うときに意識するところ決めて行うことができたと思う。	4.38
4 練習中に、どうやったらいいか技のポイントを考えることができたと思う。	4.3
5 仲間とのかかわりの中で評価（こうなっている）、助言（こうしてみたら）を相手に伝えることができたと思う。	3.86
6 仲間とのかかわりの中で、仲間からの評価（こうなっている）助言（こうしてみたら）を受け入れることができたと思う。	4.35
7 仲間とのかかわりの中で、よいと思って判断したことを参考に、意識して試みることができたと思う。	4.51
8 相手の状態を考えて補助を行うことができたと思う。	4.16
知識理解（わかる）	平均値
9 技のポイントやコツを理解することができたと思う。	4.46
10 補助の仕方を理解することができたと思う。	4.3
11 よい連続技がどういうものか理解することができたと思う。	4.49
技能習得と向上（できる）	平均値
12 できる技がよりうまくできるようになったと思う。	4.11
13 新しい技に挑戦して、できるようになったと思う。	3.97
14 自分の考えた連続技において、一つひとつの技を正確におこなうことができたと思う。	4.08
15 自分の考えた連続技において、スムーズな流れでおこなうことができたと思う。	3.92
16 自分の考えた連続技において、メリハリのある演技ができたと思う。	3.73
マット運動に対する意欲の変化	平均値
17 マット運動はもともと好きな種目だった。	2.3
18 マット運動はもともとやりたいと思う種目だった。	2.22
19 マット運動の授業を意欲的に取り組んだ。	4.3
20 マット運動は今回授業で行う以前より好きになった。	4.16
21 マット運動をまたやりたいと思う。	3.38
授業を通しての変容・効果	平均値
22 マット運動の練習を通して、仲間とのかかわり合いが深まったと思う。	4.3
23 マット運動の練習を通して、相手を意識して伝える力がついたと思う。	4.22
24 マット運動の練習を通して、身体に受けるの色々な感覚（腕支持感覚、マットの接地感覚、逆さ感覚、など）を身につけることができたと思う。	4.03
25 マット運動の練習を通して、技のポイント、コツの理解を深めることができたと思う。	4.22
26 仲間とのかかわり（グループ学習）は技をよりうまくしたり、できるようにするために有効だと思う。	4.51
27 技ができるようになるために、仲間の助言（こうしてみたら）が参考になり役だったと思う。	4.46
28 技ができるようになるために、仲間の評価（こうなっている）が参考になり役だったと思う。	4.38
29 技ができるようになるために、仲間の補助が役だったと思う。	4.16

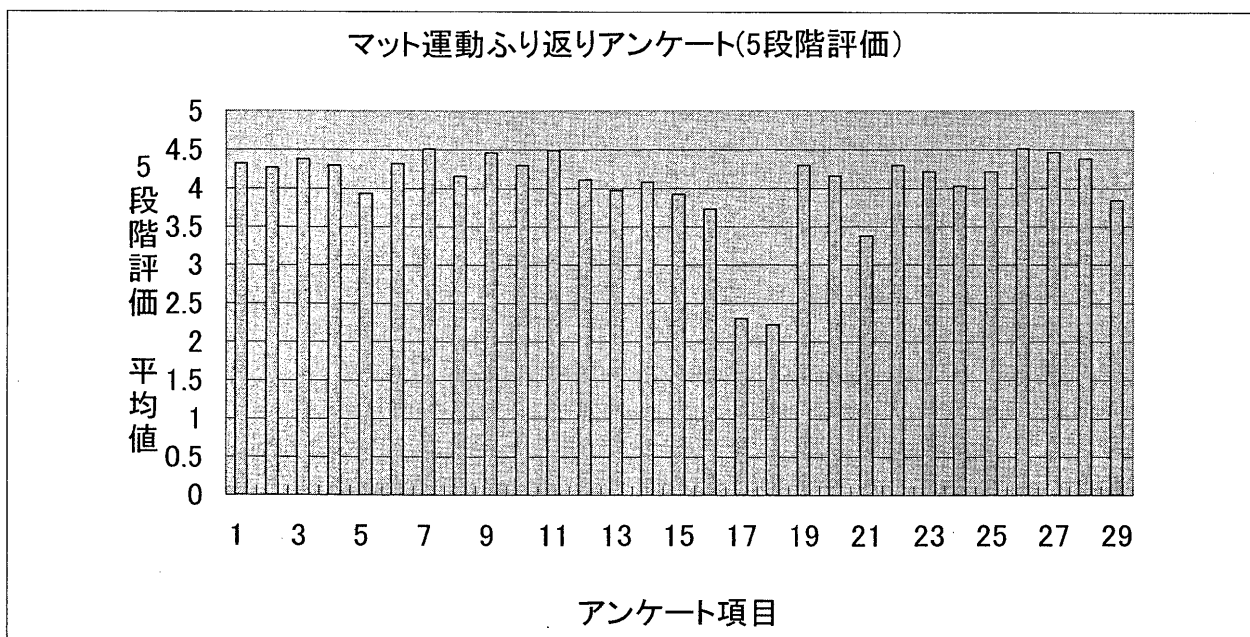


図4 マット運動ふり返りアンケートの集計結果

過程を通して、自分なりの身体感覚を身につけたり、また、技能のポイントはどこにあるのかを考えたりして、自己の身体との対話を通して内的表象を高めることができたと考えられる。また、仲間とのかかわりの中で、仲間からの評価や助言を受け入れる力が培われたといえる。しかし、設問5では、平均値が3.93であり、他の項目に比べて低く、自らの思いを発信することについては未だ十分とはいえない。このことは、技術認識や技能的なポイントをつかみきれていないため、自信を持って相手に伝えることができなかつたのではないかと推察することができる。

関連して、設問22～29は、授業を通して「かかわり合いが深まったか」「伝える力が高まったか」「身体感覚を獲得できたか」「技のポイントやコツの理解が深まったか」「できるようになるために、仲間とのかかわりや表現・コミュニケーション活動が大切か」についての設問であり、どの項目も平均値が4以上であった。このことから、本実践のテーマである「わかる」「できる」をめざしたマット運動の授業を通して、「表現・コミュニケーション力」を高めるという目標がほぼ達成できたといえる。このことは、本実践において最も成果の大きいことである。

設問9～11は、「技能の面での理解が深まったか」というふり返りである。「技のポイントの理解」が4.46、「補助の仕方の理解」が4.3、「よい組み合わせ技（連続技）の条件の理解」が4.49と、いずれの項目も高い平均値であり、体育科がめざす科学的思考力を培うことができ、これらについても成果があったととらえることができる。

設問12～16については、単一技や組み合わせ技（連続技）の技能の習得や向上についてのふり返りである。このことは、生徒一人ひとりの技能のレベルアップはなされたが、新しく挑戦した技や組み合わせ技（連続技）の向上については、平均値が4以下であり、満足のいく結果は得られなかつたといえる。実際のところ、生徒自身が満足しうるできばえにまで高められなかつたことが、図4のグラフからもいえる。「わかって、できる」「よりうまくできる」ためには、ねばり強い取り組みが必要であり、技術認識をしっかりと培い、克服・向上させていくための時間的・効率的な指導の工夫が必要であるといえよう。

設問17～21では、マット運動に対する意欲の変化についてふり返らせた。生徒はマット運動に対して「もともと好きな種目」ではなく、また、「積極的に取り組んでみたい種目」ではなかつたようで

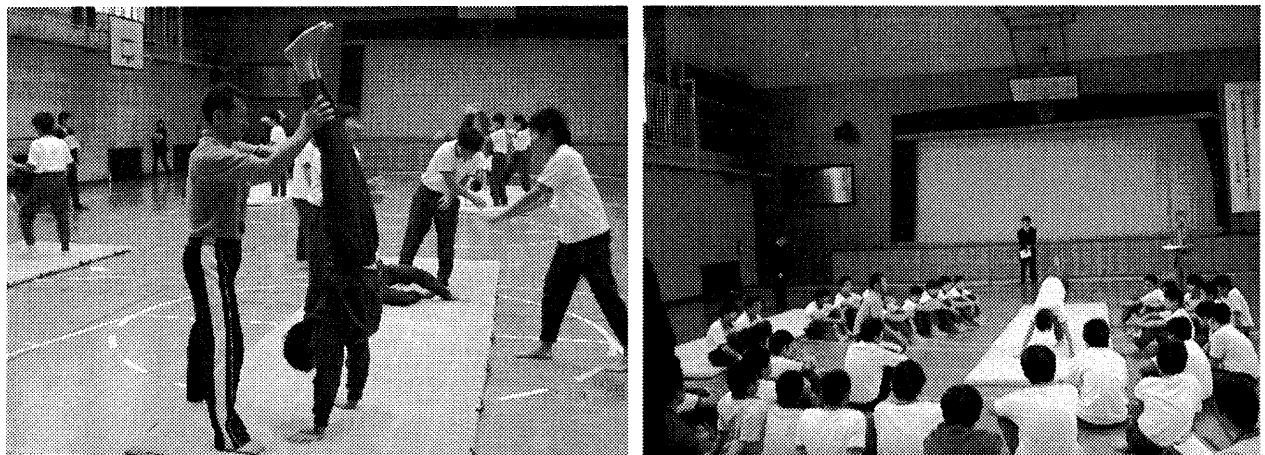


写真 マット運動の授業の様子

ある。しかし、「授業を意欲的に取り組んだ」「以前より好きになった」という項目は、ともに平均値4以上を示しており、「わかる」と「できる」の保障を通してこそ、その結果としてのやる気（学習意欲）やがんばろうとする動機付け・前向きな態度へとつなげることができたといえ、一定の成果は得ることができたと考えられる。

3 自由記述

また、生徒に授業終了後、授業で感じたことや学んだことを自由に記述させた。下記の内容は、その一部である。上段は、肯定的な意見の記述であり、下段は課題を残した記述内容である。

- ・ペアの〇〇くんが、やり方がわからない技やできない技を自分たちなりに解決して、できるようになった技がたくさんあったので、自分としては、技のポイントを説明する部分が高められ、自分にもプラスになりました。これからの授業も、教えあって技能を高めたいです。
- ・自分が直すべきところを指摘されて直し、その技が完璧に近くなったときに感じる喜びは言い表すことができないほどうれしかった。また、自分が友達に「これは、こうしたほうがいいんじゃない？」というアドバイスをして、友だちの技がよくなったりすると、また別の喜びを味わうことができた。
- ・初めて挑戦した技ができるようになったのは、先生や仲間の助言のおかげだと思う。それに、仲間の助言は、励ましにも聞こえ、その技ができるようになろうという気持ちになった。
- ・友だちが行う技の中で、できていないところをアドバイスすることで、自分もそれをふり返ることができ、自分自身その技のレベルが上がっていったと思う。
- ・うれしかったことは、どれくらいの力で足を振り上げ倒立の姿勢をとるか、ちから加減や、倒立前転の時にどのタイミングで回ったり、足を伸ばしたりしたらいいか、感覚を身につけることができたことです。何度もやることで、その加減やタイミングがより正確にできるようになっていった。
- ・他の人の演技を見ることで、自分ができない技のヒントをもらうことができたし、自分で自分の姿を見ながら練習はできないので、他の人が見て自分がどこが悪いのか、どう直せばいいかなど友だちとの意見交換が重要だと思った。
- ・補助すること、人に気づいたことを伝えるのは難しいと思った。
- ・もっとみんなにアドバイスしたり、直したほうがいいところと言えたらよかった。技ができなくてあきらめてしまったり、自信が持てなかったのも、しっかりとポイント理解してアドバイスできるようにしたい。
- ・自分ができない技に対して友だちにアドバイスをもらいながら練習したけど、そのうちすぐにさじを投げてしまったことがあった。きちんとやっていればできたかもしれない技もあったので後悔した。

これら生徒の自由記述から、相手への伝達（発信）が相互の技能向上にプラスになること、自分のアドバイスが役に立ったときや、相手の助言によってできるようになったときに喜びを感じることも、また、仲間の助言が自分の励ましにも聞こえ、やる気につながったことなどを読みとることができる。この

ことから、仲間とのかかわりの有用性について気づいた生徒が多かったといえる。しかし、今回のマット運動の学習において、コミュニケーションを図ることの困難性や、実際に伝達（発信）できなかったり、コミュニケーションが持続できないなどの思いもあったことを見逃すことはできない。

V おわりに

今回、マット運動の授業を通して、体育科における表現コミュニケーション力の育成をねらった授業実践を試みた。その結果、生徒同士が互いにかかわり合いながら、練習を積み重ねることを通して、単一技の習得・習熟が促進されたと思われる。また、技の習得過程を通して、自分なりの身体感覚を身につけたり、技能のポイントはどこにあるのかを考えたりして、自己の身体との対話を通して内的表象を高めることができたと考えられる。そして、相手への伝達（発信）が相互の技能向上にプラスになることや、仲間の助言が励みになったりやる気につながったり、あるいは課題への気づきにつながることを生徒に感じさせ、仲間とのかかわりが有用であることに気づかせることができたと思う。マット運動の授業実践において、「わかる」「できる」を中心的課題とし、「内的表象を高めさせること」「相手を意識させること」を重点において、「表現・コミュニケーション力」の育成をめざした。結果として、生徒同士が互いにかかわり合いながら、練習を積み重ねて、生徒一人ひとりが技術認識や技能のレベルアップを図ることができ、そのことを通して、生徒の表現・コミュニケーション力を高めさせるなど、一定の成果を上げることができたのではないかと考える。

しかし、残された課題も大きい。それは、技術認識が生徒相互のかかわり合いを結びつけるものであり、技術認識が培われなければ、表現・コミュニケーション活動を積極的に展開することは難しいといえる。特に、体育の授業に対して苦手意識を持ち、できない生徒にとっては、受け身になりがちとなる。したがって、指導者がきめ細かな支援や効果的な指導を工夫することで、しっかりとした技術認識をつけさせることが必要となるであろう。

体育教育は、単に運動がうまくできればよいのではない。科学的思考力、実行力に導かれた選択・判断力が、確実に培われていかなければ、運動・スポーツが生徒自身のものになったとはいえない。体育授業は、すべての子どもにとって必修の教科である。我々は、体育の授業を通して、生涯にわたって運動・スポーツに親しみ、目の前にある課題を解決できる生徒を育てなければならない。ましてや、これから激動する社会をたくましく生き抜いていくために、身体活動を通して「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意志決定力」を育成していく体育の授業の存在は、大きいといえよう。これからも、子どもたちに運動・スポーツを通して「わかる」「できる」を保障する指導に力を注ぎたいものである。今回の研究をふまえて、今後とも実践を積み重ねていきたいと思う。

引用・参考文献

黒瀬基郎ほか。「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造（3）」広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』、第35集、2003。

恩地孝明ほか。「多元的価値観を受容し戦術認識を深める体育授業（2）」、広島大学附属東雲中学校研究

紀要『中学教育』, 第35集, 2003, pp.81～90

恩地孝明ほか, 「多元的価値観を受容し戦術認識を深める体育授業」, 広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』, 第34集, 2002, pp.83～88

金子明友監修, 吉田, 三木編, 『教師のための運動学』, 大修館書店, 1996.

小林一久, 『体育の授業づくり論』, 明治図書, 1985.